

図説 真言宗の法式 基礎編 乾

第一章 道場

密教の伽藍 / 真言宗の本堂 / 須弥壇 / 宝楼閣 / 真言宗の本尊と脇侍 / 両界曼荼羅 / 真言宗の八祖および十祖 / 十二天屏

第二章 道場荘厳

五具足・三具足 / 幡 / 天蓋 / 華鬘 / 斗帳 / 幔幕・五色幕 / 灯笼 / 経机

第三章 修法壇

大壇 / 密壇 / 護摩壇 / 神供壇 / 聖天壇 / 十二天壇 / 祖師壇 / 壇敷と壇引 / 金剛檜 / 金剛線 / 五瓶 / 綵帛 / 輪宝 / 羯磨杵 / 宝塔 / 金剛盤 / 金剛杵 / 金剛鈴 / 各流派の壇上荘厳 / 各流派の壇荘嚴図 / 前箱 / 礼盤・半畳 / 脇机

第四章 供養具

供養の意義 / 六種供養 / 六器 / 火舎 / 柄香炉 / キリク字香炉 / 常香盤 / 香像 / 飯・飲食器 / 汁・餅・菓 / 燈明器 / 四面器と一面器の供養 / 供物台 / 生身供 / 精進供 / 靈供 / 百味供 / 御茶湯 / 下供 / 華籠 / 仏布施 / 名香包 / 含香包

第五章 梵音具

洪鐘 / 半鐘 / 板木 / 磬 / 鉢・打ち鳴らし / サハリ / 金剛鈴 / 鏡 / 鈸 / 錫杖 / 引磬 / 法螺 / 槌砧 / 戒尺 / 音木 / 磬子 / 太鼓 / 木魚

◆八祖の懸け方

八祖の懸け方に、懸け込み式・懸け出し式・一進け式の三種がある。

(懸け込み式)
外から内に向かって四祖を左右に懸ける様式で、各流派共に一番多く用いられる懸け方である。
密法要の形は多く口上願を用いるが、ちょうどこの懸け方と整合する。また、堂構えの建物の場合もこの様式とするという。

◆十二天屏風の使い方

伝法蔵頂においては、三昧耶戒壇の初夜後夜道場において十二天屏風が使用される。使わない流派もある。参考までに西院流の例を挙げる。

◆護摩壇の荘厳

中院流の護摩壇

◆五種鈴杵の置き様

五種の置き様に種々の説がある。すなわち、「三門三祖院」に「五種の鈴、三あり、一は足跡外に、一は五種の鈴の間に許を置く、一は五種の鈴を五種の鈴に置く、一は五種の鈴を方に置く、余方は皆これに類し置く、いわゆる西院、北院、三東也」とあるように、五種の鈴と五知来(三摩耶形)と鈴の置き方から種々の説が生じたことが伺える。ただし、今日では随方と観心の二種を用いる。

修法用の五種の鈴は金剛盤上に置くのが普通であるが、西院流は壇上に置く、五種の鈴は壇上に置くのが一般的である。ただし、中院流は半紙を三角形に折ったもの(金剛盤の代用)の意、尤も上に置くか、あるいは金剛盤を用いる。なお、塔鈴は輪宝の上に安置する習いである。

【各流派の壇荘嚴図】

図は五種を在した。五種鈴杵は曼荼羅の時に荘厳し、通常は用いない。

(中瓶を三結鈴より本尊側に置く説もある。仏供の置き様は随方を用いた。)

西院流の荘嚴図

●西院流の置数の仕方
長より敷き始めるが、最初に三角の蓮弁を作り、乾の隅に白布を回すように敷き、七折にて、坤の隅に蓮の蓮弁を作り、敷き終わる。

大正法隆寺の荘嚴図

●大正法隆寺の壇の仕方
絹一匹をもって、長の外より引き始め、七行(七幅)に至って引きおさめる。引き始めと引き終りは、共に「華」にせず、六幅となる。
折り返して、三角形を作る方法は、西院流と同じで、折り、次に上に折る。

観自在菩薩行深般若波羅蜜

多時照見五蘊皆空度一切空

親自在菩薩行深般若波羅蜜

時照見五蘊皆空度一切苦厄舍利子色不異空空不異色

色即是空空即是色受想行識

色即是空空即是色受想行識

親自在菩薩行深般若波羅蜜

時照見五蘊皆空度一切苦厄舍利子色不異空空不異色

図説 真言宗の法式 基礎編 坤

第一章 基本動作

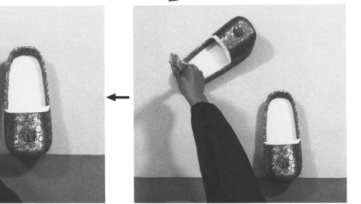
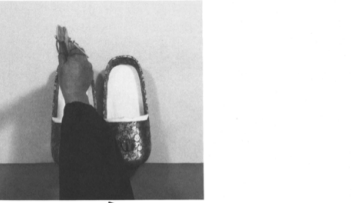
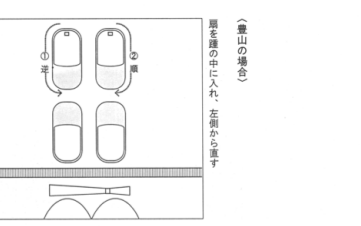
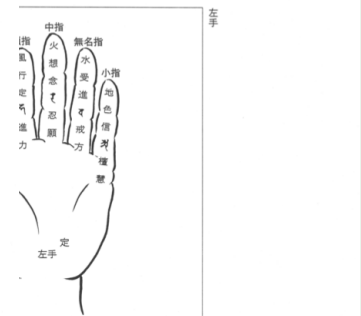
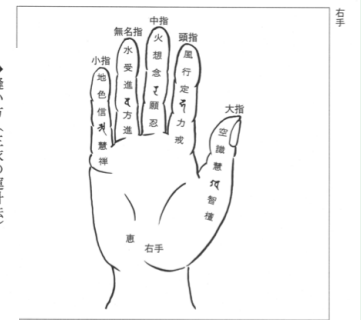
姿勢 / 起立 / 着坐 / 正坐 / 合掌 / 十度異名 / 十二合掌 / 六種拳 / 坐法 / 結跏趺坐 / 半跏趺坐 / 踞・跪・蹲 / 踞跪 / 長跪 / 蹲踞 / 礼拝 / 五体投地礼 / 中礼 / 起居礼小掛 / 立礼 / 伏礼 / 歩行 / 直行 / 歩幅 / 右折 / 左折 / 立坐から右へあるいは左へ / 坐坪に入る方法 / 回転 / 次足 / 急な階段

第二章 法衣

袈裟 / 三衣 / 三衣袋 / 三衣のいろいろ / 袈裟各部名称 / 袈裟の材質 / 袈裟の被着法 / 衲衣 / 修多羅 / 横被 / 衲衣の被着法 / 導師装束の被着法 / 衲衣のたたみ方 / 青甲 / 平袈裟 / 地蔵袈裟 / 如法衣 / 種子袈裟 / 縵衣 / 威儀五条 / 金襴五条 / 黒袈裟 / 白袈裟 / 精好 / 割切五条 / 小五条 / 折五条 / 小野塚五条 / 輪袈裟 / 半袈裟 / 法衣 / 褌衫 / 袍服 / 鈍色 / 直綴 / 長素絹 / 切素絹 / 空衣 / 襲 / 縵浄衣 / 改良服 / 被布 / 白衣 / 襦袢 / 道衣 / 作務衣 / 足袋 / 襪 / 袴 / 表袴 / 指貫 / 切袴 / 道場袴 / 裙 / 修験道法衣

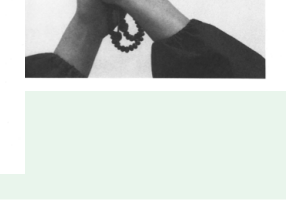
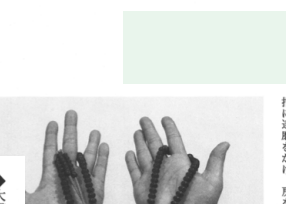
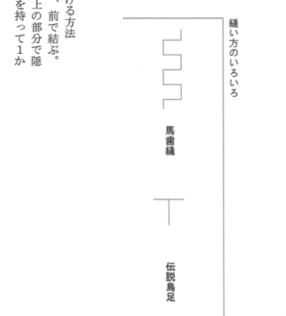
第三章 装束具

帽子 / 坐具 / 華籠 / 草鞋 / 鼻高 / 念珠 / 扇 / 大翳 / 如意 / 払子 / 柄香炉 / 経本 / 卷子本 / 居箱 / 香炉箱 / 草座

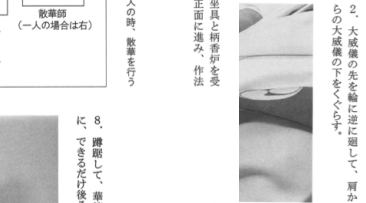


◆縫い方(三衣の運針法)
●返し縫い
袈裟は返し縫いで縫う。返し縫いとは、左図の如くである。律によれば、ある時、外道が直縫いでいた仏弟子の袈裟の糸をほらうとして大勢の前で恥をかかされたので、それ以後は返し縫いで縫うようになったという。
袈裟は、修行生活のための実用であるので、一番堅牢な縫い方を用いるのである。

●製縫口波
また、三衣は比丘自身が作るが原則で、それを作る数(僧伽は五百、聖徳太子は四日(聖徳太子)は二日)安陸(二日以内)にこれを仕立あげないと罰を受ける(聖徳太子)も規定している。
●縫い方
縫い方は、「方眼四儀」巻上に、馬鹿縫・鳥足縫・伝説鳥脚縫とあり、これを示している。それを左図に示しておく。



(西院流一伍二の口決)
1. 右手の願指と緒を掛け、左手の中指に連緒を掛け、房の中に入れる。
2. 左手を少し抑げ、右手を少し休せる。
3. 摺り切りは、右手を向こうへ押しやる。

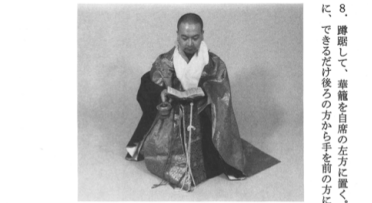
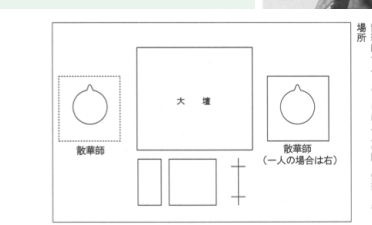


◆大威儀の結び方
●その一 大威儀を輪に左廻り(逆)に巻つける方法
大威儀を被着し、大威儀を左肩から前に垂らし、前で結ぶ。大威儀の長さは、被着した時に、石帯が袈裟の上の部分で隠れるくらいに、立って調整し、右手でその位置を持って1から結びはじめ。

1. 大威儀を左肩後ろより前に垂らし、前裏の輪の外側から、逆に通す。
2. 大威儀の先を輪に逆に通して、肩から大威儀の下をくぐらす。
3. 大威儀の先をさらに逆に通し、輪の中を通す。

●大翳の扱い方
●持ち方
右手で袈裟と飾糸を持ち、飾糸を30センチほど垂らす。

●置き方
1. まず、飾糸を放す。
2. 扇を向いて押しやる。



8. 機附して、華籠を自身の左方に置く。この時、坐具を華籠の下に敷かないように、できるだけ後ろの方から手前の方に持つてへ。

